

## 連体修飾節をめぐる日本語・ポルトガル語対照研究

織田 順子

日本語の連体修飾の説明をポルトガル語（以下ポ語）との対照で行なう場合、まず構造、語順のポイントを明らかにすることが大切であると考えます。以下の例に見られる通り、

### （日本語例）

1. 私の本
2. 日本語の本
3. 新しい本
4. きのう私が街で買った本

### （ポ語例）

1. o meu livro
2. o livro de japonês
3. o livro novo
4. o livro que eu comprei na cidade ontem

日本語の構造においては、例1と2のように連体修飾節に連体助詞のが介在する場合と、3と4のように助詞の介在が見られない場合があります。語順に関しては、日本語の場合、連体節は全て被修飾語の前に置かれるのが特徴であると言えます。

ポ語の場合を見ますと、例1の「私の」は“meu”（英語の my に相当）に当たり、冠詞“o”と共に“livro（本）”の前に位置します。それと違って、例2、3、4は冠詞を除く全ての連体修飾節に相当する部分が“livro（本）”の後に位置します。（ただし、「新しい本」の訳である“o livro novo”の場合のみ、形容詞“novo（新しい）”が“livro（本）”の前に来る可能性があり、“o novo livro”となりますが、この場合、“novo”は主観的な特別な意味合を帯びることになります。）

また、例4は他の例と違い従属節が連体修飾節を構成していますが、このような複雑な文においても修飾節であることをマークする助詞の介在がないことが注目されます。ポ語の方は、従属節の始めを示す que（英語の that に相当）が使われます。例4がポ語話者にとって特に理解しにくい、あるいはむずかしい構造となるのは、どこから従属節である連体修飾節が始まるのかわからないことに原因していると思います。もちろん、日ポ語において連体修飾節と被修飾語の位置が異なっている所にも原因があるだろうと思われれます。

以上のように、日本語の連体修飾節の全部が被修飾語の前に位置するのと比べ、ポ語ではかなり異なった構造・語順となることがわかります。この違いは日本語そのものの語順が SOV でありポ語が SVO であることと関連があるわけですが、このような根本的な語順の違いはポ語を母語とする学習者にとって一つのカベとなります。

しかし、日本語のある構造がポ語において、異なった形であっても相当する構造あるいは表現に体系的に置きかえられる場合は、それが出来ない場合と比べて学習上相対的に困難度は高くないと考えます。

同じ連体修飾節でも、ポ語にはあまり訳されない形式名詞こと・ものの例文中に「～ということ」「～というもの」が見られます。

この二つの表現は、名詞に関して田窪（1989）の言っている構造「N<sub>1</sub>という N<sub>2</sub>」と根本的に同じ

だと考え、それを前提とし例文を分析しました。「山田さんという人」などで例えることのできる「N<sub>1</sub>というN<sub>2</sub>」は、N<sub>1</sub>の指示対象がディスコースの参加者の一方にとって未知の存在である時使われると田窪は言っています。この場合、N<sub>2</sub>はN<sub>1</sub>を含み得る広い概念をもつ名詞であり、N<sub>2</sub>に当たること・ものはN<sub>1</sub>の要素に対する上位概念であるといえます。このN<sub>1</sub>のことを、中畠（1990）は「話し手と聞き手の間で知識として共有されていない要素」と定義しています。

「ということ」は次の例に見られます。

1. 宇都宮の生まれで、兄は今でもその町で裕福な呉服屋であるということも知れた。

“Soubemos (do fato de) que ela era natural de Utsunomiya e que seu irmão mais velho continua lá, mantendo uma abastade loja de tecidos.”

「宇都宮…呉服屋である」はこの例では登場人物にとって新しい事実であることを示すべく、「ということ」の前に位置しています。

同様なことが以下の文構造にも見られます。

2. ～ということ {  
    がわかった。  
    を聞かされた。／知った。  
    は初めてだ。  
    が唐突の感を与える

さらに、「～ということに気がついていない」などに見られるように、語り手にとっては既知であるかも知れないが登場人物にとっては未知の事実などもというの前に位置します。

3. わたしにはびわのシャーベットというものが存在するかどうか、よくわからなかった。

“Eu não sabia se existia um tal do sorvete de nêspera.”

例3は未知の存在、または存在そのものが疑われる場合で、やはりというがものの前に使われています。

また、次のような例も見られます。

4. 食べるということは、こんなにも困難な作業だったのかと、わたしはしみじみ思った。

“Eu senti na pele o quanto o ato de comer era um trabalho tão penoso assim.”

5. 次郎や末子というものもひかえていた。

“Na seqüência, Jiro e Hanako seriam os próximos.”

例4、5は1～3と違い、すでに知られているある行為（食べること）または人間（次郎、末子）な

どが改めて新しいもののように見直され述べられているのではないかと考えます。

以上のようにいくつかの例文を見ますと、「N<sub>1</sub>というN<sub>2</sub>」は、確かにディスコースの参加者の片側にとって未知の存在であるN<sub>1</sub>を表わすときに使われています。特に文学作品などでは語り手、または登場人物の視点を話す語り手にとって新しい出来事、事実やものなどがN<sub>1</sub>にあたります。同じ様に、トイウは既知の事柄なども特に新しいもののようにとりたてて述べる機能を持っているのではないかと考えられます。

以上挙げた例文のみでなく他の例文においても、ポ語の翻訳ではトイウは直訳されません。しかし、トイウがあることによって強調された形となる場合、ことは“fato”（事実）、“ato”（行為）、ものは“coisa”（もの）、“pessoa”（人）などに直訳されることが可能となりますが、実際には「ということ」「というもの」の表現全体は翻訳されないことが多く、比較対照にはむずかしいテーマとなります。

以上、連体修飾節の中でも、日本語・ポ語間において、異なった形ではあるが比較的体系的に対照が行なえるケースと、日本語ではトイウの介在する構造がポ語ではあまり表われない、または表われても決まった形では出て来ないケースとを発表させていただきました。

#### 参考文献

- 田窪行則（1989）“名詞のモダリティ” In：仁田&益岡『日本語のモダリティ』くろしお出版。  
中畠考幸（1990）“「という」の機能について”『阪大日本語研究』大阪大学文学部。